

平成 30 年度 第 2 回浦安市生涯学習推進計画策定懇談会

第 1 回分科会（学びの推進） 議事要旨

日時：平成 30 年 8 月 29 日（水）

午前 10 時～12 時

会場：市役所 4 階災害対策本部室

<出席委員>

関谷 昇 分科会長
藤田 朗 委員
吉野 忍 委員
上野 実千代 委員
登内 明 委員

<欠席委員>

なし

<議 事>

1. 開会
2. 分科会長あいさつ
3. 内容説明
4. 議事
 - (1) 課題の整理について
 - (2) 次期計画の方向性について
5. その他
6. 閉 会

<配布資料>

- 【資料 1】 市民意識調査等に基づく課題の整理
- 【資料 2】 課題検討シートのまとめ
- 【資料 3】 懇談会（分科会）について

1. 開会

関谷分科会長よりあいさつが行われた。

2. 議事

(1) 課題検討シートにもとづく課題と今後の方向性の検討

事務局より議事(1)について、資料1、2、3を用いて説明が行われた。

(委員) 各委員の意見がまとめられているが、直接意見をお聞きしたい。

(委員) 学習活動がしたくてもきっかけがない人とそもそも関心がない人でアプローチの仕方が変わってくると思う。活動が他の人や団体に知られていないと感じている。広報活動が重要。きっかけづくりについては、知り合いから声をかけられることが効果的であると感じる。団体同士が話しやすい場で、お互いの情報交換ができるとよい。団体の代表同士が話し合うことで、協働のきっかけが生まれる可能性がある。他の団体のことを知りたい人と、知ってもらいたい人はいると思うので、交流の機会があるとよい。

(委員) お囃子保存会の活動では、後継者が課題となっている。祭りの後に参加が増えることから、市のイベントなどに参加して、多くの人に見てもらえる機会があるとよい。団体が継続するためには、リーダーの存在が重要である。古文書を読む会に参加していたが、市の職員が中心となっていたのに、その職員が参加できなくなったら団体もなくなってしまった。市民の中でリーダーが育っていれば継続できたのではないかと。関心がない人に対しては、伝える場がないと、関心も育たない。団体の運営の仕方を市民大学などで学ぶ機会があるとよいと思う。

(委員) 人生100年時代を迎え、先を見通した取組が必要になるが、資料1の市民意識調査等からの課題と、資料3の6ページの現行計画に記載されていた課題とで、あまり変化がない。総合計画に関する意識調査で把握する施策満足度がまだ出ていないのでわからないが、満足度がどのように変わったかを確認したい。浦安市の人口動向をみると、元町のワンルームマンションで人が増えているが、中町や新町は増えていない。支えあいのコミュニティができているかが不安である。学びの場を通して、支えあいのコミュニティを作っていく、それを今の子どもたちに残すこと。そのためには、人材の育成と組織化が必要だと感じる。資料3のP7にまとめられている課題では、1番と4番について、実際には、市民の学ぶ意欲は高いのではないかと、また、団体の情報は、市では把握していると思う。ここの2番目、3番目をふくらまして提言にしていくというイメージ持っている。

(委員) 関心はあっても活動していない市民に何をするか。千葉市では、ボラ

ンティアのポイント制度を行っており、イオンと提携している。これまでの行政中心から、企業、市民を中心とした取組に移行すべきと考えている。

(委員) 関心を持つ人を増やすには、広報よりも団体に参加してもらうことが効果的であると思うが、今まで入っていなかった人が団体に入るとは、人間関係の面でも技術的な面でも不安を抱える人が多いと思う。また、経験者ですでに技術が高い人が入ってくると、団体側が壁を作ることもある。このように排他的になってしまうのは、団体のリーダーの考え方によるところが大きいと感じる。リーダー育成、マネジメント教育、人と付き合うためのリーダー研修のようなものが必要である。団体活動を持続的なものにするには、外部からの求めがあるかが大切である。自分の団体は、市内の老人ホームで定期的に演奏しており、それが活動の励みになっている。市内の施設からどのような要望があるかを把握するようなアンケートを行政の力で取れるとよい。どのような活動が地域で必要とされているか、必要とされていることをその団体の活動にできるか、ニーズと活動を照らし合わせることも重要である。

(委員) 関心を高めることについては、関心を引き出すきっかけを作り、つなぐことを充実させること、きっかけづくりには、情報発信が必要になる。成果を現場に生かすことについては、地域で必要としているところと団体とのつながりが重要であり、活動の広げ方については、団体の運営の方法を学ぶことで、既存の活動を持続させることにつながり、コミュニティによる支えあいを意識することや活動を通じた支えあいになっているか、という視点が重要となってくる。行政が縦割りになっていると言われていたが、コミュニティにも、自治会等いろいろな団体がある中で、それぞれが活動しており、連携しにくくなっている可能性がある。組織ごとに縦のまとまりはあるが、横につながりができにくいのが、日本的な傾向とも言われている。学びから実践へのつながりが弱い原因であると思う。市民大学は、市長部局の管轄で教育委員会ではないため、学んだ人が地域に入っていくことを重視している。生涯学習は、もっと幅広い考え方になるが、市民大学は市民活動を中心としている。生涯学習から市民大学につながる流れがもっとあってよいと思う。松戸市では、担い手別に入り口を作っており、地域活躍塾という名前で、自治会、NPO など、主体別に、学びから体験ができるようなプログラムになっている。

(委員) 市民大学と社会教育団体、市民活動団体の関係は、もっとつながるとよい。地域には、自治会の他、シニアクラブ、あんしんマンションライフ事業、社協、学校などがあるが、これをつなぐ取組が必要。昨年

度から、協働推進課でまちづくり活動マッチング事業「つなぐプロジェクト」がスタートしている。社会教育団体と市民活動団体では、市の所管が異なると思うが、双方がうまく連携できていると団体も動きやすくなるし、活動に参加したいと考える人にもわかりやすくなると思われる。

- (委員) 市民活動、生涯学習と、それぞれ各部署が団体を抱えているのか。
- (事務局) 市民活動センターのホームページに登録している市民活動団体とまなびねっと URAYASU に登録している社会教育関係団体がある。団体によっては両方に登録しているところもある。
- (委員) それぞれが団体を抱え込んでいると、つながりにくくなってしまう。人が足りない団体と、参加したい人が、結びついていかない。情報として一元化する自治体もある。マッチングがニーズとして出てくるようになってきている。
- (委員) リーダーの養成機関というはあるのか。認定のような制度はあるか。
- (事務局) 生涯学習では、修了証のようなものは出していない。子育てについては人材養成を行っているなど、各部署が独自に行っている。
- (委員) 市民大学も、社会教育の方でまとめた方が、現場につなぐことができるのではないか。
- (委員) 市民大学で学んだ後、活動につなげている人が少ないのであればなんとかする必要はある。
- (委員) 市民大学の中で、生涯学習やスポーツの人材養成講座を行うことがよいのではないか。
- (委員) 協働推進と生涯学習の融合が必要。協働の前に、まず交流の場が必要である。これらを長期的な課題としてとらえたい。
- (委員) 古文書の会のようにならないよう、市民の中でリーダーを養成することが重要である。
- (委員) 活動を続けるためには、予算をつけることだけではなく、つなげていくことの方が効果的といえる。
- (委員) 養成講座の内容にはマネジメントを学ぶ内容が入っているのか。
- (事務局) 把握している中では、そういった内容では行われていない。
- (委員) 分野ごとにもないのか。
- (委員) 市民大学ではどうか。
- (委員) 市民大学では、学びについてのリーダー研修は行っていないが、市民活動センターではリーダー講習を行っていると聞いている。
- (委員) 市役所1階の市民活動センターでは、継続的な受講による資格認定のある講座ではないが、リーダー講習のような市民活動にすぐに役立つ講座を開催している。
- (委員) 大学でもオープンカレッジを行うなど、民間のものでも学ぶ機会が増

えている。民間とタイアップすることで、活動の幅が広がっていくのではないか。

- (委員) 市民と行政の協働を進める必要がある。
- (委員) ニーズと市民活動をつなぐシステムを作ることができるとよいが、なかなか難しいことである。
- (委員) 作ることも難しいが、それを知ってもらうことも難しいと思う。
- (委員) 団体の存続のためのあり方について知ることが重要である。関心を持っているのにも関わらず、学びの場が合わなくてやめてしまう人もいる。
- (委員) 団体のメンバーでも、最初は技を磨くことでいっぱいであり、その後、運営について考えるようになってくるものである。
- (委員) 視野が広がって団体の全体がわかるようになる。
- (委員) そうなることが、成長にもつながる。
- (委員) 女性は、出産や夫の単身赴任、親の介護など、人生のステージで活動できる範囲が異なってくる。それぞれのステージで参加できるようにするには、人生のステージにあわせて活動の幅が変えられるような選択肢があると、気軽に参加でき、活動を続けやすくなると思う。
- (委員) スキルによつての入口や、ライフステージごとの入口があるとよいかもしれない。
- (委員) 浦安市には、よさこいの団体が3つある。障がいのある子どもと家族が多い団体、障がいの有無や年齢に関わらず老若男女が集まる団体、シニア女性メインの団体がある。子どもの頃から障がいの有無にかかわらず一緒に演舞することで、子どもが当たり前のように障がいと向き合い、対応できるよう成長し、大人になってからの活動にも関係してくると思う。また、よさこいは、見る人に喜んでもらえる。人のために何かをして、喜んでもらえることも学びになる。
- (委員) 積み重ねのようなものができるとよい。学校教育の中でも、小学校で学んだことが必ずしも中学校や高校にそのまま繋がって学べるとは限らない状況である。環境問題など一つのテーマを小、中、高でつなげて学んでいけるような環境があるとよいと思う。

(2) 分科会における議論のまとめ方について

事務局より議事(2)について、資料3を用いて説明が行われた。

- (委員) 提示された案では、課題と対応が分かれているが、それぞれ対応する形で書かれていた方がわかりやすい。
- (委員) 細かく項目を分けるまではしなくてもよいが、現状と問題点、対応、スケジュール、どこがやるか、といったことがわかると具体的でよい。

(委員) これから学ぼうとする人の目線で記載できるとよい。

(事務局) まとめ方については、他の分科会にも意見を出してもらい、整合を図った方がよいと考えられるので、他の分科会開催後に、調整していくことになることを了承願いたい。

3. その他

第2回分科会の日程は後日事務局が調整することとなった。

4. 閉 会

以上